

【論文】

サミュエル・グリーンの「民衆図書館」

—1876 年論文の 28 事例から見えるもの—

Relations between libraries and readers in S. S. Green's perspective

諏訪敏幸

SWA, Toshiyuki

キーワード: レファレンス・サービス; Samuel Swett Green; パブリック・ライブラリー;
公教育; Horace Mann; 対人援助; サービス思想; アメリカ図書館大会

Received: 2006.8.28 Accepted: 2006.9.24

1. はじめに

図書館活動の大半は、いつ誰が始めたかはっきりしない。図書の貸出や、何らかの形態の目録や分類による資料の組織化は、ほとんど図書館それ自体と共にいつとも知れぬ時代から存在した。図書館員による人的援助と情報提供のサービスも、個別的・偶発的にはおそらく図書館員というものがある限り古い時代から何らかの形で存在したに違いない。しかしそれがレファレンス・サービスという 1 つの活動分野として認識され、組織的に行われるようになったのは、19 世紀末のアメリカを嚆矢とする。その出発点が、1876 年全米図書館大会（アメリカ図書館協会創立大会）で S.S. グリーンが読み上げた論文「The Desirableness of Establishing Personal Intercourse and Relations Between Librarians and Readers in Popular Libraries」だった¹⁾。この論文は同年 10 月の American Library Journal, 1(2-3), pp. 74-81 に「Personal Relations Between Librarians and Readers」という簡潔なタイトルで掲載された²⁾。

本稿では誌上に掲載されたこの論文（以下「グリーン論文」または単に「論文」と呼ぶ）の分析を通じて、グリーンが「民衆図書館」popular library³⁾と呼んだ初期のアメリカ公共図書館のサービスがめざした方向の一端を垣間見ることとしたい。特にグリーン論文の中心を占める 28 の事例に着目し、時代背景を考慮しつつその内容と表現を検討する。

2. 背景—S. グリーンと 1876 年の教育、図書館、アメリカ社会—

2.1. サミュエル・グリーンとマサチューセッツ州ウースター

サミュエル・スウェット・グリーン (Samuel Swett Green, 1837-1918) は、アメリカの公共図書館草創期を代表する図書館員の 1 人である。メルヴィル・デューイ (Melvil Dewey)、ジャスティン・ウィンザー (Justin Winsor)、チャールズ・エイミィ・カッター (Charles Ami Cutter) らと共にアメリカ図書館協会の創設に加わり、1891 年には会長となった。1867 年

からマサチューセッツ州ウースター公共図書館（Worcester Free Public Library）の理事、1871年から館長の職にあり、1909年の隠退まで在職した。

ウースター市は、マサチューセッツ州中部、州都ボストンの西約 60km に位置する州第 2 の、しかしボストンに比べればはるかに小さな内陸の都市である。マサチューセッツは植民地時代からのピューリタン教育の伝統を背景に 19 世紀まで教育・文化の最先進地域だった。特に次節で述べる州初代教育長ホレース・マンの教育改革は、コモン・スクールによる公教育の確立とその無償化・義務化で全米の教育に影響を与えた。草創期のアメリカのパブリック・ライブラリーはこの公教育改革の延長上にあると考えられる。そこでまずマンの公教育改革を概観し、続いてパブリック・ライブラリーへの流れを追いたい。

2.2. ホレース・マンの公教育改革

ホレース・マン（Horace Mann, 1796-1859）は 1837 年から 12 年間にわたりアメリカ合衆国初の州教育長として教育の全分野にわたる改革に取り組んだ⁴⁾。特に公教育の成立に果たした役割は大きい。アメリカは州ごとに多様な制度を持つが、マンの公教育思想とその指導のもとに成立したマサチューセッツの公教育制度は、その後の全米の教育に多大な影響を与えた。マンの公教育思想の核心は、子どもの生得権としての文化的・道徳的発達と、共和制の下で社会を支える民主主義的市民の育成という点にある。このため教育は、すべての子どもに共通（common）であり無償でなければならなかった。これを制度的に実現したのがコモン・スクールである。この理念に沿って、税金による経費の公費支弁、質的保証のための教員の養成、児童労働が広く行われる中での就学義務化⁵⁾、教育の政治的・宗派的中立、学校図書館の整備等々の諸政策が推進された。マンはこのような政策に対する反対党の攻撃や州民の間の利害対立・無関心を克服しなければならなかった。そのため一方で教育の普及が社会の生産力を高めて経済的に貢献し、階級間の利害対立を徳性の涵養によって緩和するであろうと資本家階級に訴え、また他方において教育は社会的地位向上をもたらすであろうと貧困層に説いた。これらは多分に戦術的なものとされるが、とはいえ経済への教育の貢献という思想もまた、マンによってもたらされたものと言える。

2.3. 公教育からパブリック・ライブラリーへ

1850 年代のニューイングランドで、市民の一般的利用のための図書館がフリー（誰でも無料の）・パブリック（公の）・ライブラリーとして誕生したのは、このような公教育の論理的延長としてである⁶⁾。マンは州教育長第 3 年報（1839）で「若い世代が学校で知的な読書の習慣を獲得したのち、いったい何を読むべきなのか」と問題を提起した⁷⁾。ワイト（John Burt Wight）牧師はかれが起草した州図書館法案の前文（後に削除された）で、「十分な増大していく情報源を、コモン・スクール以後の生涯…全住民に供給する」ためにパブリック・ライブラリーが必要だと述べた⁸⁾。

19 世紀前半まで、市民の読書要求に応える役割を主に担っていたのは、ソーシャル・ライブラリー（組合図書館、読書クラブ）と貸本屋である。特にソーシャル・ライブラリーは会員が求める図書を安価に提供し、市民の読書活動におおいに貢献した。しかし自発的

団体であるソーシャル・ライブラリーは経済的基盤や影響力の広がりという点で致命的な欠陥を抱え、その限界はもはや明らかだった。教育が税金によって無償で提供されるべきだという原則がいったん社会に根付くや、教育の延長である図書館にもその原則は徐々に適用されるようになった。こうして 19 世紀半ば以降、州法の下で自治体が設置するパブリック・ライブラリーがマサチューセッツを中心にニューイングランド全域そして全米へと急速に広まっていく。

2.4. 1876 年のアメリカ社会とパブリック・ライブラリー

アメリカの 19 世紀は産業革命と新興諸州興隆の世紀だった。経済は度重なる不況と第二次米英戦争・南北戦争の戦禍を経験しながらも発展し、自らが創出した民主主義社会への確信と生活向上への希望をアメリカ社会にもたらした。「アメリカ歴史統計」によると、1870 年から 1880 年にかけて、アメリカ合衆国の全人口は 38,558,371 人から 50,155,783 人へと約 1.3 倍に増加、うち都市地域の人口は 9,902 千人から 14,130 千人へと 1.4 倍余りの増加であり、人口増大と都市化が急速に進んでいる⁹⁾。他方で大量の労働者階級の創出と欧州からの新たな移民は、従来のコミュニティの均質性を破壊し、社会の分裂を進行させた。世紀を通じてこれらはいずれも公教育とその一部であるパブリック・ライブラリー発展の強力な推進力として働いた。なぜなら第 1 に、このような中で教育こそが民主主義的社会建設と経済発展の基盤だと認識された。第 2 に社会の中上層階級は労働運動の浸透を恐れ、下層階級の知性・徳性涵養による分裂の克服を強く期待した。第 3 に社会の下層階級と新たに社会進出を開始した女性層は、一方では地位向上のために、他方では娯楽を求めて、読書に殺到した。これらの力を現実の公教育とパブリック・ライブラリーの進展に結び付けた中心勢力は一今日から見ると意外かもしれないが一中上層の民主主義的な穏健保守派だった。これに対する抵抗は、課税に反対する富裕層、福祉を求める下層、および「公」の介入を嫌う個人主義的伝統の中から現われた。この対立は 1830 年代から始まり、公教育に続いて 1870 年代にはようやくパブリック・ライブラリーもこれらの抵抗を克服しつつあった。

合衆国建国 100 年の年、1876 年に開催されたフィラデルフィア万国博は、合衆国の全社会分野にわたる発展の確認の場でもあった。ここではその後の工業大国化を象徴する電話機、タイプライター、ミシンなどと並んで、合衆国内務省教育局の編纂による公共図書館特別報告書も展示された。報告書には全米から 19 館種 3,649 館が掲載された。うち「Public」は当時公共図書館法が成立していた 11 州を含め 21 州 348 館である。そのうち実に 164 館がマサチューセッツ州に集中している¹⁰⁾。このような中で全米図書館大会は開催された。

3. グリーン論文

3.1. 成立経緯

文中自ら語るところによれば、グリーン論文は 1871 年の就任以降自らウースター公共図書館で実践し成功をおさめてきたサービス方法について述べている。グリーンははじめこれを 2 種類のパンフレットにまとめた。うち 1 つは同図書館第 16 年報の補遺「ウースター

市公共図書館特別報告」として発行され、さらに理事会の要請により先述の 100 周年記念博覧会で配布された。グリーン論文はこれを拡充したものである¹¹⁾。

3.2. 論文の概要と 28 の事例

論文では冒頭、上流人士や学者ではない一般の利用者にこそ図書館員の個別的な助力が必要だと述べ、論文の基本的立場を明確にする。冒頭 3 段落半ほどを訳出してみよう。

学者や上流階級の人々が図書館にやって来ると、図書館はかれらに気を遣い、かれらが言葉にしようとしまいと意を汲んでくれる。

それより低い水準の生活を送っている一般の人たち、あるいはしっかりした少年少女が、自分の欲することを自由に口にできるには手助けが必要である。

誰か手近にいて、たとえ自身には重要でないことでも耳を傾けて理解し、共感をもって受け止めてくれるなら、こういった人たちも質問がしやすくなり、気兼ねなく利用できるようになることだろう。

調査を目的として公共図書館を利用する人たちは大いに援助を必要としている。幾つか例を挙げて実際のようにすを見てみよう。

これに続き、延々 3 ページ余りにわたって事例が挙げられる。事例は 28 ある。表 1 にその概要を示す。以下、事例への言及は、事例 1、あるいは[1]のようにする。

事例に続いて 3 ページ半ほどグリーン主張が述べられる。その内容は次の通りである。

最初に、既存の図書館員にこのような仕事が可能であることを示す (0.5 ページ)。図書館員は各分野の専門家ではなく一々の知識もないので、おのずからサービスの限界はある。にもかかわらず図書館員ならではのやり方—他の図書館を紹介することも含めて—で大いに読者の助けになることができるとグリーンは主張する。続いて目録との関係について紙数を割いているのが目に付く (0.5 ページ)。当時はコレクションと読者を結び付ける基本手段は目録だと考えられ、図書館は目録作りにしのぎを削っていた。この立場から見れば、優れた目録こそ重要であって、グリーンの提唱する人的援助は二次的なものに過ぎない。C.A. カッターなど中心的な図書館員たちからは、グリーンの提唱への批判も現われた。グリーンは当時の主潮に対する自説の立場をよく理解していたと思われる。目録の意義を認めつつ、しかし一般の利用者には目録の使用法の指導や資料の評価など個人的な手助けが必要なのだと自説を擁護している。これは目録との対立を避けてその補助的手段として対人援助を位置づけた戦術的言辞とも取れる。しかし利用者に資料の評価を教育する事例と併せ見るならば、むしろこれこそ図書館をその蔵書ともども教育手段として活用する道なのだという主張が垣間見える。次に、図書館員と利用者との個別的交流の利点を 4 点挙げている (1 ページ余)。第 1 に利用者の資料利用への貢献、第 2 に利用者の要求の把握、第 3 にコミュニティへのアピール、第 4 に蔵書の活用。このための図書館の組織と助手の仕事のあり方にも触れる。そして、かれ自身がこのやり方を 6 年間実行した結果、「利用は飛躍的に伸び、コミュニティにその真価を高く評価されるようになった。」と述べている。さらに、個人的交流の実際について種々の角度から述べる (1.5 ページ)。この仕事のため

に図書館員が備えるべき資質、保つべき態度（誠実さ、情報提供へのこだわり、民主主義の精神、合理的な好奇心、利用者の意思の尊重と自立の促進、意見が分かれる問題への中立、教育的態度）、図書館の規模に応じた運用などである。その多くは今日の図書館員にも共感し得るものである。いわゆる英米型図書館の一つの原型がここには窺える。

最後に、このようなサービスによって図書館はコミュニティから支持を受けるであろうし、それは図書館の財政的基盤改善にも寄与するだろうと述べて論文を結んでいる。

表 1. グリーン論文の 28 の事例

※番号は便宜上与えた。分類・要約表現は筆者（諏訪）による。

#	利用者		利用目的・資料要求		対応種別	語数
1	職業人	壁塗装職人	実用	装飾の見本	資料	220
2	職業人	職人	実用	テーブルの脚の意匠例	資料	68
3	職業人	大理石職人	実用	ある特定の姿勢のライオン像	資料	20.5
4	職業人	木彫職人	実用	鷺の絵	資料	17.5
5	市民	英国人会会員	知識	聖ジョージと竜の戦いの図像	資料	48
6	青少年	学童(女)	知識	計測単位の由来となった王の名	資料+指導	158
7	青少年	学童(男)	知識	スエズ運河の歴史	資料+指導	79
8	青少年	学童(女)	知識	アドリア海地方の結婚式	資料または案内	92
9	市民	市民	知識	自宅の落雷対策の基礎知識	資料	142
10	職業人	ビジネスマン	実用	商工業統計	資料	152
11	職業人	(男)	実用	特許公報	資料に関する情報	97
12	青少年	弁論会会員	知識	弁論資料	案内+助言	167
13	青少年	小さな子供	知識	ニューイングランドの鳥の卵	資料	29
14	青少年	年長の子供	実用	ボートの建造方法	資料	26
15	市民	(男)	知識	前世紀の日食の日付	資料	97
16	市民	(女)	知識	“カイバシラ”とは何か	資料	76
17	行政	委員会の長	実用	(貯水ダムの補修)	新着図書情報	58
18	青少年	学生	知識	語族・神話の起源に関する新説	資料	31
19	市民	若い女性	知識	鳥の名の綴り	回答	28
20	市民		知識	引用句の出典	回答+特定の図書	29
21	市民		知識	セルビアの地図はどれが良いか		19
22	市民		知識	インディアン戦争の正しい記述		23
23	市民	市民	実用	移住予定先の土地の案内記事		22
24	市民	取引委員会	実用	メートル法の解説論文		35
25	市民	青年	娯楽	船旅の間に読む本のリスト		61
26	市民		娯楽	パカンス中に読む本のリスト		46
27	青少年	学生	学習	論文の主題選定と資料集め		24
28	青少年	学童(男)	学習	作文のヒントと素材		13

3.3. レファレンス・サービスの形成へ

この論文の中でグリーンが提示したのは、個別的な利用者の要求に応じた図書館員による人的援助という新しいタイプのサービスに他ならなかった。もっともかれ自身はそれを一つの手法と考え、「個人的な交流と関係 personal intercourse and relations」「援助 assistance」等と表現している。グリーンの発言に対しさっそく反響が現われた。S. ロースステーンによれば、以後の歩みは次の通りである¹²⁾。大会後、かれのやり方はまたたく間に公共図書館に広がった。M. デューイはこれを「近代図書館の理念」と捉えて組織的な人的援助サービスに発展させ、近代図書館の中核業務の一つに引き上げた。そして 1890 年代には「レファレンス・ワーク」の用語と概念が定着した。大学図書館での歩みは遅く、レファレンス・サービスの定着は第一次世界大戦後を待たなければならなかった。これは図書館員を事務職員に準ずる者とみなす大学の伝統が主な原因である。

アメリカ図書館協会創設 100 周年の 1976 年、同レファレンス・成人サービス部会の情報サービスガイドライン検討状況報告は、「Bless you, Samuel Green!」のタイトルを掲げ、「この 100 年の間、レファレンス・サービスの本質は概念的に変化していない」と評している¹³⁾。

4. 予備的考察—事例の全般的性格と多様性の特徴—

4.1. 事例の分量と個数に関する問題

事例は、まずその多さが目を惹く。誌上で実質 7 ページほどの論文の約 45%を事例が占め、その数も 28 にのぼる。この執拗なまでの多さは、何を物語るのだろうか。

単なる饒舌や不用意でこのような構成をとるとは考えにくい。成立経過に見たようにこの論文はアメリカ図書館大会での報告に至るまでに何度も見直される機会があった。

表 1 に示した通り、事例は 50 語にも満たない短いものが半数以上である。もしも印象を強めることが目的なら、冗長さを排し、数を絞って個々の事例を十分に表現した方が説得力がある。これほどまでに多くの事例を挙げる必要がどこにあったのか。

ここでは 3 つの問題が考えられる。第 1 は現場感覚の強調である。これらの事例はいかにも現場的であり、かつ次から次への局面の変化は図書館のサービス部門における日常そのものである。かれは現場の視点で問題を提示することによって会場の図書館員たちをかれと同じ位置に立たせ、共に問題を考えさせようとしたのではないか。第 2 は多様性の強調である。現実が既にこのような広がりや複雑さをもって存在しているということを事例の多様性は物語っている。図書館サービスを考える上でその多様性こそがグリーンにとって重要な問題の一つだったのかもしれない。第 3 に、この多様性は現実性の証でもある。多様性は問題の根の広がりを、つまりはかれの主張の正当性を示してもいる。

4.2. 多様性の構造

各事例は、利用者像の提示、要求の提示、解決の提示という 3 要素を基本構造として持つ。だがすべての事例がこの 3 要素で構成されるわけではない。解決を欠き、または他の

事例と共有するもの、3要素の他に背景説明を有するもの、一般化した説明が続くものなどもある。3要素は互いに密接に関係しつつ、それぞれについて多様性が見られる。

これら3要素は同等ではない。利用者については、叙述から背景がわからないものが6例ある（事例15, 16, 19, 20, 21, 22）。それぞれ [15] some inquirer, [16] a curious woman, [19] a young lady, [20] another, [21] one inquirer, [22] another と表現され、事例16と19を除いてプロフィールもわからない。また、解決に関しては、一部には解決が重要な役割を演じている事例[15,17]も見られるものの、事例21から28のように解決には触れない事例もある。これに対し、要求が具体的に示されない事例はない。事例全体の構成を見ると、各事例の語数にも表れているように、事例1～12で基本的な問題が一通り提出され、事例13以下はもっぱら多様性の提示に充てられているように見受けられる。この部分、特にその後半で、事例がほとんど要求例の列挙の様相を示すことは注目に値する。以上の観察から、グリーン論文では他の2要素に比べて要求の多様性こそが最も強く意識されていると考えられる。

5. 利用者

5.1. 利用者層の分布

前述の6例を除く22例については、要求内容などからおおよその利用者像が了解される。大別すると、学生・児童が8例（事例6, 7, 8, 13, 14, 18, 27, 28）、職業場面の成人が8例（事例1, 2, 3, 4, 10, 11, 17, 24）、私生活場面の成人・青年が6例（事例5, 9, 12, 23, 25, 26）である。

性別は全28事例に対して男（職業や代名詞からの推測を含む）17例（事例1, 2, 3, 4, 5, 7, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 17, 18, 23, 25）、女4例（事例6, 8, 16, 19）、不明7例（事例20, 21, 22, 24, 26, 27, 28）であり、性別の偏りが目立つ。女性は青少年の比率が高く（4例中3例）、これに比べて男性は成人比率が高い。特に、職業場面の成人で女性の事例は見られない。加えて、後年アウトリーチの重要課題となった人種あるいは民族への言及が見られない。階級についてもいささか及び腰である。これらについては次節で検討したい。

この他にも幾つかの利用者グループが欠如している。現代では重要な利用者層である幼児と老人の事例が、[13]がそうかもしれないと思われるのを除いて見当たらない。その理由は、第1にパブリック・ライブラリーが公教育の延長だと考えられたこと、第2にこの論文が「調査を目的として図書館を利用する人たち」を扱うことから、説明されよう。また学者・上流人士も冒頭部分で予め除外が宣言されている。

5.2. 女性、労働者、外国人

注意深く見ると、ジェンダー、階級、宗教、民族について奇妙な偏りが観察される。グリーンは社会的対立の要素となる問題を巧みに避けているように見える。

ジェンダーについては女性の事例はわずか4例である。うち2例は学童だが、この2例は内容的にも女性というより学童の事例である。学童の事例は男女半々である。ピューリタンの宗教教育から初等教育が出発したこの地では、初等教育に男女差を設けるという発想はなかった。対して成人・青年の事例は圧倒的な男女差がある。当時は高等教育も女性

に門戸が開かれつつあった。多くの若い女性が下層工場労働者として働き、専門職にも女性の進出が著しかった¹⁴⁾。18世紀から19世紀初頭のソーシャル・ライブラリーでも女性の読書と図書館利用—しばしば正会員の夫や父を通じて—は見られた¹⁵⁾。19世紀には小説と教養を求める女性が読書に殺到し、その力はパブリック・ライブラリー実現の背景ともなった¹⁶⁾。そのような中で事例における男性中心の成人利用者像はいささか異様でさえある。

階級については、職人が4例現われるものの工業労働者や農民・下層自営業者は皆無で、その他の職業人は中上層もしくは行政上層である。当時の一般的状況は、産業革命の進展の下での階級分裂、移民労働者による民族的・宗教的多様化である。その具体的なようすは、州中西部に位置する内陸の貧しい町ホリヨーク Holyoke を素材とした詳しい研究が参考になる¹⁷⁾。この小さな町でさえ、製紙・製綿・織布・ワイヤ製造などの工場にカナダ、ドイツ、アイルランドなどからの移民や多数の未成年女子を含むおそらく数千の男女労働者が劣悪な労働環境で働き、就学義務を無視した児童労働も広く見られた。1850年に3,700だった人口は1873年には14,000まで増加し、その半数が外国人労働者だった。非英語話者を除外してもなおかつ膨大な労働者層があり、当時の風潮としてそこに渦巻く向上心、知識欲、娯楽への要求が部分的にでも図書館に向かわなかったはずはない¹⁸⁾。少なくとも、公教育とその延長である図書館がかねらの存在に目をつむることはできなかったはずである。

なお、敢えて冒頭に手作業の職人を4職種続けたことは、「民衆の図書館」を強調するグリーンの意図の表れかもしれない。学童—当時まだ必ずしも利用者とみなされていなかった—の3事例と共に、鮮やかな印象を与えたに違いないと思われる構成である。

6. 要求

6.1. 要求の多様性

要求はきわめて多様である。おそらく聴衆は目を瞠る思いをさせられただろう。そして多様なながらも、市民生活との距離の近さを感じさせる事例が多い。新築の家に避雷針を取り付けようとした市民は、ああでもないこうでもないというセールスマンの口説に困惑し、まず避雷針の基本を知らなければと図書館を訪ねる[9]。インドへの旅に出ようとする青年は、船旅の間に読む本のリストの作成を求める[25]。職人たちは意匠のヒントを求めてやってくる[1-4]。知的好奇心を満たしにやってくる子供たち[6-8]は図書館が公教育の延長であることを思い起こさせる。たまたま目にしたのである *scollop* (scallop=帆立貝、その貝柱) という言葉の意味を調べに来る好奇心の強い婦人[16]や、いつも見かける鳥の名前は「Clyte」ではなく「Clytie」が正しいのではないかと聞きに来る若い女性[19]は、今日のように各種の情報源が手近にない時代に、図書館がいかに人々の知識の源泉として機能していたかを思わせる。グリーンは、何よりも図書館が日常生活の中でこのような多様な要求を持つ市民たち—とりわけ「より低い水準の生活を送っている一般の人たち」や「少年少女たち」—の知識の源となり得ることを、数多くの事例で示そうとしたのだと考えられる。

6.2. 取り上げられた要求の特徴

事例で取り上げられた要求の多くは2つに大別される。1つは職業・生活・行政などの場面で実用に関わる知識である。事例1-4,9-11,14,17,23-24の11件がこれに当たる。もう1つは学習・研究および本人の知的好奇心や知的成長に関わる知識要求であり、事例5-8,12-13,15-16,18-20,27-28の13件がこれに当たる。事例21-22は目的不詳のため性格不明、25-26は教養でなければ娯楽目的と思われる。事例は圧倒的に事実知識に関するもの一科学・技術・工芸・地誌・歴史など一に偏っている。中でも実用的要求の多さが目立つ。

要求の実用的性格をよく示すのが、学術・宗教書への要求の偏りである。事例ではこれらも実利的利用に傾いている。学者・上層階級ではなくより下層の市民の利用を強調する論文の立場を考えれば、このような偏りはうなずける。学術的要求には大学図書館や私蔵蔵書がより良く対応しただろう。パブリック・ライブラリーで重要なのは、市民が自ら関心をもってこれらを実生活に活かし、また知的・道徳的発達の糧とすることである。グリーン的事例もそこに集中している。ここには先述のホレース・マンの効用論の影も見える。

6.3. 事例では不十分にしか取り上げられなかった要求

グリーン的事例には、当時広範に要求があったに違いない文字世界の少なくとも2つの大きな分野がごく弱々しくしか扱われていない。フィクションおよび時事・社会問題である。フィクションは事例25-26、時事・社会問題は事例12（4つの弁論課題）と17（ダム補修に関する住民要求への市当局の対応）のみである。他の要求が日常の問題や疑問に直結しているのに比べ、これらはいかにも遠まわしで、生々しさを欠く。

実は事例ではなく、後段の主張の中でこれらに関わる叙述が現われる。フィクションに関しては、対人援助の部署にどんな人材を配置すべきかを論じた箇所、「利用者にとって、どんな小説が良いか図書館員やそのスタッフに選んでもらうというのはよくあることだ。こうやって利用される本はたいへん多い。」と述べている。人選の基準になるくらいなので、フィクションに関する相談は実際多かったのだろう。教育関係者の図書館への期待の一つは図書館が健全な図書を供給し、扇情的・悪徳的な有害図書を排除し、読者の嗜好を高めることにあった¹⁹⁾。したがってこの叙述は当時の倫理的基準に合致した。

時事・社会・政治問題に関連しては、図書館員がとるべき態度として「政治・芸術・歴史・哲学・神学に関する特定の立場からの宣伝は、いかなるものも厳正に排除すべきだ」と述べている。逆説的にこの主張は、論争的諸問題がサービスの現場にも現われていたことを示す。民主主義的市民社会の形成に何より必要なのはこれらの諸問題に関する情報提供だろう。だがこれらの生々しい社会的対立はグリーン的事例から排除されている。

ギャリソンはグリーンが「日曜開館、労働者へのサービス technical service to laborers、大衆の望む『扇情的』なフィクションの容認といった、図書館刷新活動の普及を熱心におこなった」と評している²⁰⁾。しかしグリーンがこの論文で抑制を働かせたことは間違いないように思われる。要求と利用者に関する限り、グリーンはかれの図書館思想の最も先鋭な部分を敢えて事例には出さず、フィクションと時事問題についても図書館がすべきことはあるということを示すに止めた。そして市民と市当局、教育者そして図書館内外の有力者の

誰もが認める穏当な事例を並べて、かれの「人的援助」という主張を展開したのである。

6.4. 要求叙述に見るグリーンの姿勢

目的と背景を明確にした要求叙述は、2つの点でグリーンの姿勢を表している。グリーンは第1に、図書館が地域の人々にどう役立つかを強く意識し、実際的な市民生活に役立つ図書館の姿を打ち出そうとしている。学術のための図書館とも娯楽のための図書館とも異なる新しい図書館類型を、グリーンは意識して模索しているように思われる。第2に、グリーンは利用者の要求に的確に応えようとする姿勢を持ち、それを可能にするのは要求の分析だということを自覚していた。単に求められた資料を提供するにとどまらず、要求の背景を適切に理解した上でより深い情報提供を行おうとする、現代のレファレンス・サービスの姿勢がここには既に見られる。グリーン「個人的関係」の真骨頂はこの点にあり、グリーン論文はこの意味でも今日に続くレファレンス・サービスの先駆けといえてよい。

7. 解決

後段でグリーンは「本にさわったことがない人や調査ということの経験がない人に対してはことさらにこのような援助が必要だということがよく分かるよう、例示では特に注意を払った。」と述べ、さらに他市の図書館や他種施設の紹介などの方法にも言及している。図書館の立場からサービスを考えるのではなく、情報を求める利用者の立場から何が必要かを考えるという立場がここには鮮明に示されている。利用者に役立つ方法を貪欲に追求しようとする姿勢は事例にも横溢している。書架に案内する場面があることからウースター公共図書館は開架式だったと推測されるが、グリーン「サービスは書架案内や資料探しの手伝いにとどまらない。豊富な資料知識を駆使して利用者に適切な資料を提供する[1-5,13-14,18]だけでなく、どんな資料に求める情報が掲載されているか調査し[15-16]、その情報が掲載されている箇所を示し[6,9-10]、知的世界の初心者には知識の扱い方を教育し[6,12]、資料の使い方を教え[7-8]、時間がない利用者には資料や資料についての情報を送り届ける便宜をはかり[10]、質問に自らの知識で即答し[19-20]、求められた図書のリストを作り[25-26]、…と、考えられるあらゆる方法をとっている。目を惹く事例として、住民の間から貯水ダムの補修要求が現われた折に関連新着図書の情報を市の担当委員長に連絡するというもの[17]がある。利用者の直接的な要求に基づかず図書館独自の判断によるものであること、また住民を措いて市当局への情報提供であるという2点で、今日の図書館活動から見て異例であり、利用者、要求の点でも特異である。この事例の含意は、一方でコミュニティと図書館との密接な関係の一面—利用者だけでなく行政機構を通じたコミュニティへの貢献もあり得る—を示すと共に、他方で図書館の活動の幅—図書による情報提供という本質から外れない限りその形態を問わない—を示すことにあると考えられる。

図書館サービスのひとつの典型的なスタイルは、利用者の資料知識とそれに基づく要求を前提として、図書館は非介入的な資料提供に徹するというものである。今日でもこれが図書館サービスの理想的または原則的スタイルだと信じる図書館員は少なくない。これに

対しグリーンは資料と資料知識をセットで提供する。そして必要なら、事例 6,12,17 などに典型的に見られるように、利用者の知識と要求に対する介入的サービスも辞さない。事例 6,12 そして事例 7,8 のような介入的サービスは、図書館が教育機関だという認識があつて初めて可能になる。教育とは介入であり、「自分で考える」民主主義的市民を育てるには、それを意識した教育的介入が不可欠である。グリーンサービス思想の先進性は伝統と隔絶したものではなく、民主主義的市民を育てることを教育の目標とし、また図書館を社会的教育機関と位置づけたニューイングランドの思想からの、自然な発展と言える。

8. 表現に見る利用者へのまなざし

最後に、利用者に関する表現について触れておきたい。

この論文で一般的に利用者を表す言葉として最も良く使われているのは reader(s)で、24 回現われる。他に inquirer(s)が 10 回、investigators が 2 回使用されている。今日の図書館学論文で最もよく用いられる patron や client は皆無、これらとの中間に位置する user(s)は 6 回である。グリーン用語の多くは利用に関わる特定種類の行為という面から行為者としての人を捉えたものであり、今日の patron や client が図書館（員）と利用者という社会的関係を捉えた、すぐれてカテゴリカルな用語であるのとは対照的である。この論文において、利用者は図書館との関係に置かれた「利用者」というより、読む・尋ねる・調べるといった行為をする個別的・自立的な「人」なのである。当時の用語法でもあろうし、必ずしもグリーン個人に特徴的な用語とは言えないかもしれないが、利用者への個別的対応を強調するこの論文の立場にふさわしく、利用者はここでまず何よりも個別の人格として捉えられている。この視線は、利害、職務、法規を介して対象者をカテゴライズする商人、事務員、官僚のそれではなく、個々の人格を直接受け止めようとする教育者のまなざしにより近い。

9. 結語—グリーン「民衆図書館」における図書館と読者の関係—

本稿では、グリーン論文に挙げられた 28 の事例をめぐり、そこに何が書かれていて何が書かれていないかを数え上げるという単純な方法を軸にグリーン「民衆図書館」を探った。

論文の眼目は人的援助という手法の提示にある。それは大胆かつ徹底的で、かつその発想において当時主流の目録主義と大きく隔たっていた。他方で利用者と要求のことさらな多彩さは、その裏にある抑制と共に、聴衆の注意を引き付けながら同時に安心感を与え、この隔たりを超えさせる役割を担っていたと考えられる。

論文におけるグリーンの姿勢は教育的であり、その目は一人一人の固有の要求に向けられている。そのサービス思想の先進性は、あくまでも教育的機関であろうとすること、またコミュニティに貢献しようとする、つまりパブリック・ライブラリー的であろうとするところに由来する。学術的図書館で培われた非介入的図書館観と真っ向から対立する介入的な図書館サービスが生まれたのは、まさに公教育思想の直接的帰結としてであった。

レファレンス・サービスはアメリカ的図書館サービスの核心をなす。それは読者に資料

以上のものを提供しようとするところに特徴がある。ローススティーンは、グリーンは直接的には読者の読書嗜好の改善という意味で人的援助に関心を持ったのであり、その目標は図書館がより利用者に親しまれ利用されることに尽きるのだと評価している²¹⁾。しかし本稿の分析からは、やはりグリーンは民衆教育の一機関として図書館を捉え、かつ利用者の利益の視点から図書館のあり方を構築しようとしていた—その帰結としてかれがこの論文で提示したもののこそ、今日のレファレンス・サービスの原型なのだと、考えられる。

註

- 1) Rothstein, Samuel. The development of the concept of reference service in American libraries, 1850-1900. *The Library Quarterly*. 1953;23(1):1-15
- 2) 「発言した」のではなく「読み上げた」と言えるのは、*American Library Journal* に掲載されたテキストの中に「今読み上げているこの報告で in the paper I am now reading 申し上げる問題について皆さんのお耳を拝借したいと思ったのは、…」という表現が現われるためである。
- 3) 「通俗図書館」と訳すことが多いが、本稿ではグリーン論文の趣旨を踏まえて「民衆図書館」とする。
- 4) 以下、本節は主に下記文献による。
久保義三. 教育の経済的生産性と公共性: ホレース・マンとアメリカ公教育思想. 東信堂, 2004
- 5) しかし児童労働が障害となりその成果は漸進的なものだった。学校在籍率の詳細な分析は下記を参照。
南新秀一. アメリカ公教育の成立: 19 世紀マサチューセッツにおける思想と制度. ミネルヴァ書房, 1999. pp. 59-104
- 6) 本節およびグリーン時代の図書館の状況は、主に下記 3 文献、特にシェラによる。
シェラ, ジェシー・H. 著; 川崎良孝訳. パブリック・ライブラリーの成立. 日本図書館協会, 1988
ディッツィオン, シドニー著; 川崎良孝・高島涼子・森耕一訳. 民主主義と図書館. 日本図書館研究会, 1994.
ギャリソン, ディー著; 田口瑛子訳. 文化の使徒: 公共図書館・女性・アメリカ社会, 1876-1920 年. 日本図書館研究会, 1996
- 7) シェラ, 前掲書, p. 244 なお公教育の延長としての図書館という発想については、同 p. 192 も参照。
- 8) シェラ, 前掲書, pp. 200-206
- 9) 合衆国商務省編; 斎藤眞, 鳥居泰彦監訳. アメリカ歴史統計. 第 1 巻: 新装版. 東洋書林, 1999. pp. 15, 12
- 10) 桒上衛. 1876 年以前設立アメリカ公共図書館一覧. 近畿大学短大論集. 1984;17(1):167-219
- 11) Green, Samuel Swett. *The public library movement in the United States, 1853-1893 : from 1876, reminiscences of the writer*. Boston : Gregg Press, 1972. . pp. 302-317
- 12) ローススティーン, サミュエル 著; 長沢雅男監訳. レファレンス・サービスの発達. 日本図書館協会, 1979. pp. 47-91.
- 13) Vavrek, Bernard. Bless you, Samuel Green!: a discussion of RASD's new Information Service Guidelines. *LJ*. 1976 April 15;101(8):971-973
- 14) 図書館員にも急速に女性が進出しつつあったが、ギャリソン（前掲書, p. 7, pp. 243-261）が指摘するように、当時はまだ女性図書館員たちの意識も含めて男性中心だった。グリーンは、librarian は男性代名詞 he で受ける一方、その助手 assistant は一貫して女性代名詞 she で受けている。
- 15) 例えばマサチューセッツではなくサウスカロライナ州チャールストンの例だが: Raven, James. *London booksellers and American customers: transatlantic literary community and the Charleston Library Society, 1748-1811*. University of South Carolina Press, c2002. Pp. 16, 70-71, 200-203.
- 16) シェラ, 前掲書, p. 12, p. 100, p. 204
- 17) Green, Constance McLaughlin. *Holyoke, Massachusetts: a case history of the industrial revolution in America*. Yale University Press, 1939. 特に第 3-4 章, pp. 66-136
- 18) しかし 1870 年に町の図書館が開設されたものの単に楽しむために本を読むのは知性を損う見下げた行いだと考えられていた。同前書, p. 109
- 19) ディッツィオン, 前掲書, pp. 95-96
- 20) ギャリソン, 前掲書, pp. 82-83; p. 340
- 21) Rothstein, op. cit.